

寺報 善巧

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山善巧寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

寺ごよみ
十月

- 一日 お講(板屋)
- 二日 竜谷教会来院
- 六日 お講(三日市・手薄なので心ある方、お手伝いを！)
- 九日 善巧寺 報恩講 報恩講
- 二〇日 前住三十三回忌 は二〇日の午前中まで。同日午後からは布教は本山布教使・浦田秀栄師。
- 前住職の三十三回忌法要。記念講演は、大阪の井上智勇先生がお越しです。先生は京都大学、奈良教育大学の名誉教授で、文学博士、前住の三回忌にも講演を賜りました。今回はじつに三十年ぶりのご来院です。めったにないこのご縁に、全門信徒の方々、おさそい合わせの上お参り下さいますように。
- 二二日 うらやま日曜学校・おたのしみ・やきいも大会
- 二三日 門徒報恩講 東孤・新浜・板屋地区



三法要記念建設事業の完成も間近。写真は仕上げを急ぐ正面玄関。

十月十九日・二十日
報恩講 勤修
法教 浦田秀栄師
法話 利井興弘師
十月二十日午後一時
前住三十三回忌法要
記念講演 井上智勇博士

来る十月二十日午後一時より、善巧寺前住職 深教院釈俊夫法師の三十三回忌法要が営まれます。師は、善巧寺第十九世の住職。昭和二十一年十一月八日が命日です。明治十三年四月八日、善巧寺十七世住職 順円の次男として浦山に生れています。当時の善巧寺は、現在の位置ではありませんが、板葺きの本堂でした。小学校は、浦山で四年、三日市で四年、当時の学制に則って通学しています。学校の成績は抜群で、左義長のとき、師の習字の紙が一番高く飛んだと伝えられています。中学は、県立富山中学校に進みました。此処では、英語が得意だったそうです。卒業後、笈を負うて東京に遊学しています。当時、日本中の英才の集う、第一高等学校です。後に、学界、思想界に名を挙げた青年達に伍して、勉学に励んだことでしょう。東京帝国大学では、文学部に進み、ドイツ文学を専攻しています。卒業後、金沢第四高等学校、岡山第六高等学校の教授を勤め、学生の語学指導に当たっています。大正七年、十八世住職慈心院釈僧眼法師の示教により、十九世を継ぎ、信州上宮寺住職萩原高秀師を、住職代理とし、善巧寺法務に当らせています。

深教院釈俊夫法師の 三十三回忌法要を迎えて

六高時代、文部省留学生として二カ年の間、ドイツに滞在して中高ドイツ語を研究、京都に移って、京都大学、第三高等学校、龍谷大学に、職を奉じています。此の間「ニーベルンゲン」の歌基礎の研究によって文学博士の称号を受け日本に始めての「ゲーテ協会」創設に力をつくし、ドイツ政府からは、日独文化交流に功労があったとして、「フンボルト章」を受けています。更に、昭和十年、善巧寺の離れを新築し、明教院百五十回忌法要を盛大に勤修しています。国際的な学者でもあり、善巧寺住職として門徒の信望も厚かった深教院の法要に際し、三法要を目指しての新建築も竣工の期を迎えて、門徒の皆様御披露出来ることとなりました。学者の住職に相応はしく、井上智勇先生に、法要当日の記念講演をお願いすることになりました。先生は、京都大学名誉教授文学博士、奈良教育大学名誉教授の碩学です。お揃いで、御来寺下さい。最後に「晩村」と号した師の俳句を――小春日や菱銘鮮やかに仰がれて在りし日の面影かたれ老銀杏樹秋の夕陽しめやかに古杉なつかしき

住職 雪山俊之 (晩村)

「はかせのごえはん」思い出いろいろ



著書「ニーベルングの歌」

お年寄りの門徒の方からよく聞かされるのだが「ついでに（朔日）のごえはん（御院称）」は、善巧寺第十七世住職、順円のことであり、私の父方の祖父だが、私が生れた時にはもう此の世にない。命日が一日だったから、このように呼ばれているのだが、現在の善巧寺本堂を建立した方で、二塚、浄誓寺の生れである。「十五日のごえはん」は、私の伯父で、十五日が命日だったのだ、此の称があるのだが、私にも、此の伯父にはかすかな記憶がある。私が小学校一年の時、亡くなられた。葬式にも参列して



森脇画伯による前住の肖像

いる。私の父は、八日が命日だが「はかせのごえはん」と呼ばれている。昭和初年、当時では、近隣に類の無かった文学博士の称号を得たので、皆から、尊敬の意味を含めて、このように言われている。でも、現在は、直接、父を知っている門徒の数も、少なくなっている。今生きていたら九十八才。六十才で亡くなっている。私がもう六十七才だから、私も、どうやら父の年齢まで生き延びた訳だし、息子も、亡父死亡当時の私の年齢に達している。何かの縁が感ぜられてならない。昭和二十七年十月、父の七回忌の時に、ゆかりの方々の文章を集めて、小冊子にした。その時、追悼文を書いて下さったのが、梅原真隆、萩原井泉水、舟木重信、岡崎初雄の諸先生である。梅原先生は本願寺勸学、



昭和二十一年十一月五日、当時、京都に住んでいた私（左）と父（右）の夫婦写真。父は、浦山に駆けつけた時

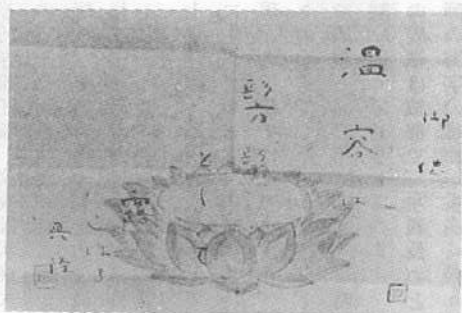
は、もう、意識が無かった。昏々と眠っている父に何度呼びかけても返事はなかった。十一月八日、父は眠るが如き大往生を遂げた。野辺の送りを経て囲炉裡を囲み、濁り酒を酌み乍ら、長老の門徒たちと、父の思い出を語り合った日のことを思い出す。異口同音に「いい人だった。やさしい人だった」と父の温容を讃えていた。十一月と云うと、門徒報恩講で多忙な

富大学長であった和上。萩原先生は父の二高時代の友人。俳誌「層雲」の主筆者。舟木先生は四高時代の教え子。ハイネ研究で知られたドイツ文学者。最後に岡崎先生は京大時代の教え子。元富山大学教授である。夫々各界の第一人者だったが今は四人共、

独文学界に多大の貢献

時である。十月二十八日、称名寺の報恩講、梵鐘供養には父が導師をしている。同じ頃、門徒の法要に赴いたとき、平常、余り酒を口にしない父が、氣持よく盃を手にして、そのまま眠り込んでいったと云う話も聞いた。下男は「夜中に起きるたびに書斎に灯がともっているのを見た。あんなに本ばかり読んでいて、一体、睡眠をとる時間があるのだろうか」と感心していた。篤実な人格と、晩年の門徒に対する好々爺の印象が、森脇画伯の手に成った現存の父の肖像画から偲ばれる。

（雪山俊之）



▲七回忌の際に贈られた梅原真隆師の歌

雪山俊夫の略歴

- ▼明治一三年四月八日 浦山善巧寺次男に生れる。父順円 母むら
- ▼同二〇年 浦山小学校に学ぶ。
- ▼同二四年 三田市高等小学校。
- ▼同二八年 富山中学校に入学。
- ▼同三三年 第一高等学校に入学。
- ▼同三七年 東京大学に入る。
- ▼ドイツ文学を、藤代頼輔博士に学ぶ。「帝国文学」に、トーマスマンを紹介す。
- ▼同四一年 金沢第四高等学校教授となり、金沢市新堅町に住う。
- ▼同四二年 福井県坂井郡本荘の龍島みちえと結婚。
- ▼同四四年 長男 俊之誕生
- ▼大正元年 岡山第六高等学校の教授となる。ドイツ語主任。岡山市門田屋敷に住む。次男慶正誕生
- ▼同三年 三男朗誕生。南山堂、南江堂よりドイツ文法、ドイツ語教科書出版。
- ▼同五年 岡山市内山下に住む。
- ▼同八年 長女 漆子誕生。
- ▼同九年 文部省留学生として、ドイツ国留学を命ぜられる。ライプツヒ大学にて、ドイツ中世文学を研究。フランス、イギリス、アメリカを経て帰国。
- ▼同一年、大村書店版ゲート全集「詩と真実」翻訳出版。

七回忌法要記念冊子より

お父さんの思い出

荻原 井泉水



法要に際して、井泉水師から贈られた色紙には「おもい出というも四十年はつくつくほうし」とある。

君のお父さんには、こんな事があったよ。

あれは、大正の何年だったかね岡山にお住いの頃だった。後楽園や、鳥城や、市の案内をしていただいた時のことだったよ。

玉島で、餅三昧をやったことがあって、よく出掛けたが、其の帰りだったかも知れない。何でもハイヤーをやとって、君のお父さんと二人で、自動車に乗っていたときのことだった。今では、よく使う言葉だが「オーライ」というね。その「オーライ」の話が出たとき、私が訊ねたんだ。

「オーライ」といふとき、ドイツ語では何というかね。ところが、

に着せしは四時四十分なりき」

以上は、父、十七才、富山中学在学中の事である。

汽車も無く、人力車で富

山の宿に向った模様

が想像されて、興味深い

日記は、三月迄、続き、

皇太后陛下の葬儀のこ

とやら、参謀長の演説

の要旨やらが、文語体

の達文で墨書されてい

て、明治の青年の客室

が偲ばれる。

今日は祭日。孫達も在宅で、友

達が来ているらしく、やかましく

騒いでいる。午后も引続き、父の

お父さん早速、仰言った。

「オーライかね。それはシェー

ンと言うね」

此のことを、何だか今でも、よく憶えているよ。一高では、寮が違っていたのだろう。はつきりした記憶がない。東京大学では、上村清延、成瀬無極、武林移想庵、小牧健夫など、大体、同じ頃だったと思う。当時、岡山の六高の教授だった志田素琴、松本彦二郎、何れもよく知っている。

私が「層雲」を出したのが明治四十四年だから、丁度、君が生れた頃だな。古い「層雲」が君の所にあつたら一つ見てごらん。

(註、昭和二十七年八月五日宇奈月富山館にて)

日記を読む。明治四十四年は、私の生れた年。誕生日一月十六日の項を此処に引き写す。

「午后五時、謡曲「鉢の木」を

「アア、降つたる雪かな」まで唸

れる頃、表に電報の音があつた。

「リクグンパンザイ」との飛電が

本荘より来たのであつた。予は父

となつた。大なる責任と大なる希

望と大なる慰樂を同時に得た。

晚餐を喫して「アンシンシタ、ボ

シノケンコライノル」と返電した。

雪はしとくんと降つて居る」

私は、母の実家、福井県坂井郡本

荘の興源寺で生れている。その頃

父は金沢第四高等学校の教授だつ

た。就床 十時。

「ニーベルンゲンの歌」基礎の研究」の執筆。

同二年 二女汐子誕生。

同五年 第六高等学校教授を

辞し、京都に移り、京都大学に

て、ドイツ中世文学を講ず。

第三高等学校、竜谷大学講師を

兼任。

「ゲーテ協会」を創設す。

「ゲーテ年鑑」編輯、「ゲーテ

とカントとの接触」「ゲーテと

絵画」を同年鑑に執筆。

昭和二年 文学博士の称号を受

く。「ニーベルンゲンの歌」基

礎の研究」を大岡山書店より出

版。

昭和三年 三女深子誕生

同一年「ニーベルンゲンの

歌」翻訳を岩波書店より出版。

善巧寺にて、明教院百五十回忌

法要を勤修。

フンボルト章をドイツ国政府よ

り受く。



京都市松カ崎に新宅を構える。

同六年 妻みちえ死亡。

同十八年 京都の職を退き、帰

郷。

同二十二年二月八日 逝去。

本願寺より深教院の院号受く。

九月十五日(金) 敬老の日 曇
小雨
六時起床。大工さんはもう仕事を始めている。
今日と明日とで、「大樹の間」の天井張りを仕上げる予定のこと。私の方は珍らしく、今日一日仕事が無い。昨日まで、何かと忙しく、十日間毎日、富山迄出掛けていた。曇り空だが、快適な気温。
朝食は例によって、コーヒー、トースト、野菜サラダ。一通り新聞に目を通し、二階の八畳に落ち着く。先日から気にかけていた父の遺品の整理を始める。日記が二冊、見付かった。
一冊は、小型の手帖。もう一冊は、「明治四十四年、重要日記」

九月十五日(金) 敬老の日 曇
実業之日本社発行」である。
達筆の書体から、判じ物を解くように読み続けている中に、昼食の時間になる。
面白いと思われる箇所を、此処に書き写して置く。
「明治三十年一月七日。我が親むべき郷里。我が愛する所の郷家を距り、我が厚情なる、我が慈愛深き母兄と袂を別ちしは午前八時頃にてありき。それより、徒歩。
若果を過ぎ、三日市を距りて魚津に着せしは正午十二時。即、茶屋に憩いて疲労を醫し鰯鍋を治し、一輛の腕車に命じて魚津を発せしは零時三十分。
滑川、東水橋、新庄町を過ぎ富山



住職日記

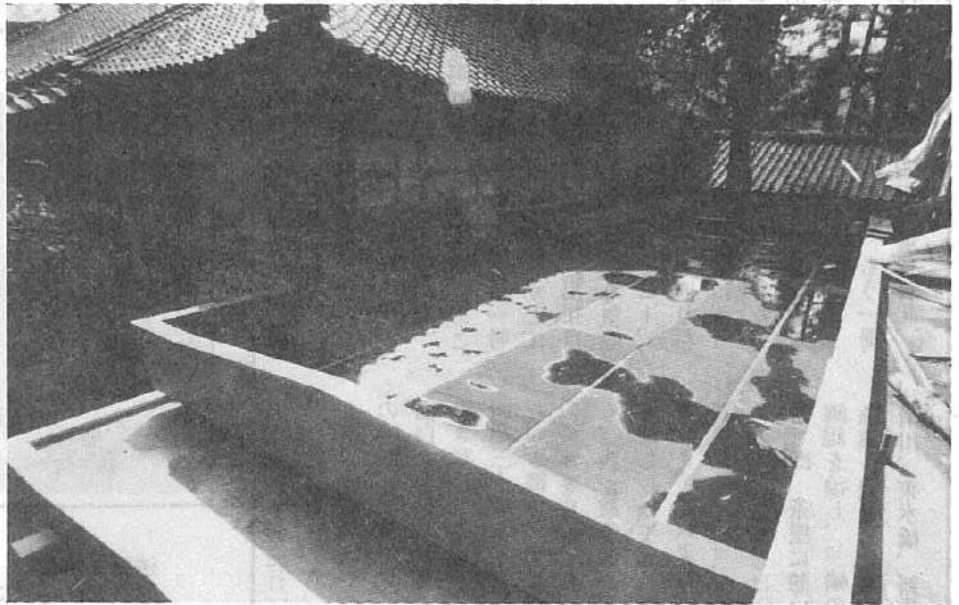
が偲ばれる。
今日は祭日。孫達も在宅で、友達が来ているらしく、やかましく騒いでいる。午后も引続き、父の

完成間近

よろこびのツチ音が浦山に響きわたってから、早くも半年の月日が流れました。三法要記念の第一期建設事業は、その間、着々と進められ、いよいよ完成です。

寺にはいつて、まず目を引くのがこれまでの庫裡と本堂との間に光る「土岐桔梗」の家紋。善巧寺の新しい表玄関です。

お寺参りにこられたあなたは、この玄関からあがって、正面の門徒茶所で一服。十畳の間には堀こたつが切っており、正面から、足の悪い方も楽にすわっていただけます。そして奥はお内仏の間。ふすまをはずすと、冬場の法座ができる広さ。門徒

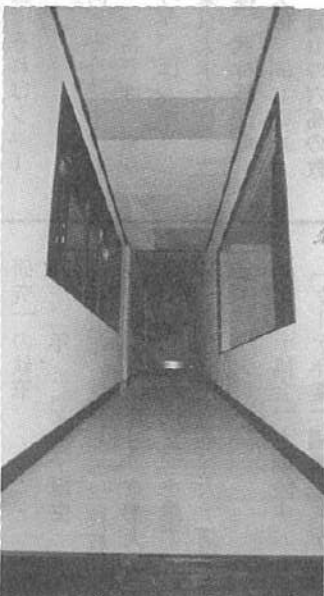


▲三法要記念事業で出来上がった庫裡の全景。手前が玄関と門徒集会所、中庭のイチョウをはさんで奥が明教院文庫(甘露室)と奥座敷(空華殿)



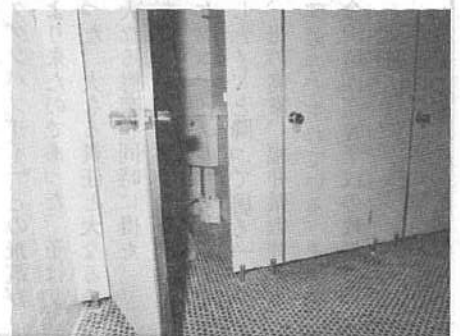
▲玄関を入ると正面にひろがる門徒集会所、奥は御内仏の間。

◀本堂へつづくスロープ。突当りの窓が仏飯所。



▲玄関わきにできた事務所

▼前の事務所あとにできた手洗所



寺
ごよみ

十一月

- | | |
|-----|-------------------|
| 一日 | お講(愛本新) |
| 二日 | 門徒報恩講 上野地区 |
| 三日 | 明教院を偲ぶ 二百回 |
| 四日 | 秋の閑法旅行 忌を四 |
| 五日 | ひかえ明教院の遺徳をしのぶ 年後に |
| 六日 | バス旅行です。誕生の地、勉 |
| 七日 | 学の地、本山、そしてゆかり |
| 八日 | の寺をめぐるります。二泊三日 |
| 九日 | で費用は二万八千円。申し込 |
| 十日 | みは十月二〇日迄。 |
| 十一日 | 一三日 門徒報恩講 中陳窪野 |
| 十二日 | 一四日 門徒報恩講 柳沢地区 |
| 十三日 | 一六日 お講(浦山新) |
| 十四日 | 一八日 門徒報恩講 魚津 |
| 十五日 | 一九日 うらやま日曜学校 |
| 十六日 | 二〇日 門徒報恩講 出地区 |
| 十七日 | 二二・二五日 〃 栃沢・中新 |
| 十八日 | 二七・二八日 〃 浦山新 |
| 十九日 | 三〇日 〃 石田地区 |
- ◆門徒報恩講の日程は都合で変更になることがあります。その都度連絡をとりますのでご了承下さい。

建設事業



▲裏の庭をとりまく左は新築の奥座敷。右奥が基礎をしめ直した離れ。右が新築の廊下。中央の木はラカン樹。植え替えて緑の葉が美しい。

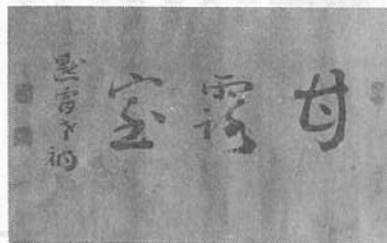
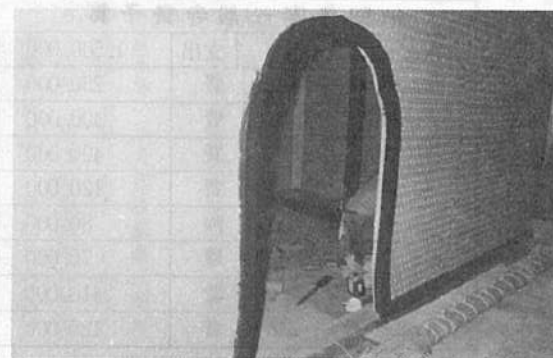
の方々のいこの場でもあります。
玄関右わきには、事務所もできました。しんらん文庫や門信徒の名簿、現在帖、過去帖がここにおさまります。
奥の座敷は、これまでの御殿の面影を残す上段の間。ふすまには佐々木大樹さんに一筆描いていただこうと目下交渉中。
奥座敷と廊下一つはさんだ小部屋は、明教院の記念文庫「甘露室」。庭の杉材を使い、入り口には、前の御殿の火焔窓。
寺参りのローソクやお供えは、これからは台所へ持ってゆかず、本堂わきの仏飯所へどうぞ。
設計は東孤義之さん。大工は本波孝さん。どちらも善巧寺の門徒さん。わたしたちの寺を心のふるさとにと、がんばって下さったおかげで、十月十九日の報恩講からは、寺の機能を十二分に発揮することができそうです。



▲右の奥座敷にあげられる明教院ゆかりの「空華殿」の額。



▲新築の奥座敷「空華殿」



◀左は明教院文庫「甘露室」



▲本堂へつづく奥の廊下
右「空華殿」左「甘露室」

寺
こよみ
十二月
一日 お講(下立愛本)
二日 門徒報恩講 下村
三日 門徒報恩講 大橋
四日 お講(浦山)
五日 門徒報恩講 下立愛本
六日 門徒報恩講 内山
七日 門徒報恩講 普沢地区の
八日 報恩講はこの日から二八日ごろ
九日 まで。
一〇日 うらやま日曜学校・年の
十一日 終わりのもちつき大会。
十二日 除夜会 大みそかの夜、
一年の行事のしめくくりとして
つとめられ、午前零時を機して
除夜の鐘をつきます。テレビを
みながらこたつの中での年越し
もけっこうですが、若い者と一
緒に鐘をつきにこられて、寺の
御堂に初参り、そして庫裡の座
敷で住職と樽酒の鏡を割り、お
年玉をいただくのもいいもので
す。ことしは是非、あなたも。

三法要

- ・宗祖 700回忌
- ・御誕生 800年
- ・明教院 200回忌

第二期本堂修復は二年後に 8月総代・理事会で決まる

善巧寺総代

会は、八月十

九日に開かれ、

五十二年度的一般会計決算報告を了承、五十三年度の予算案を別表の如く決めました。

一方、このあと引き続

第一期建設事業終る

き開かれた三法要理事会では、現在進行中の建設事業に関しての中間報告があり、庫裡増築の費用は、火災報知機の設置や事務所等の追加工事分も含めて、計二千百万円になることがわかりました。

当初はこのうち千五百万円を農協より借入れて、業者支払いに当てて予定でしたがこの五月からスタートした特別懇志内陣法名の収入が門徒の協力で予想以上にあり、これを一時、建設費にまわすこととして、結局借金は一千万円にとどめることができました。

これによって、第一期の記念事業は無事終了し、第二期の本堂修復については、借金返済の二年後からとりかかることになりそうです。四年後の法要にむかって着々と進められる善巧寺再建計画に、全門徒一致のご協力をお願いいたします。

ひとひと 仏参の心得

お作法

○あなたは仏だんの前に、いつもどのような気持ちでお座りになりますか。そしてどのような心でお参りされますか。先祖の供養のためですか？自分のとなえる念仏の功德をあてにして、ですか？

○浄土真宗のお念仏のみ教えは、そのどちらでもありません。なにとも思ひのままにならず、苦しみに泣く私を、お救いくださるみ仏のお慈悲をよろこばせていた

くばかりーこれがわたしたちの仏参の心得です。

○蓮如上人は「仏法には、まいらせ心わろし。これをして御心に叶

わんと思う心なり。仏法の上には何事も報謝と存すべきなり」ときとして下さいました。つまり、仏

参は、報恩謝徳のいとなみです。

○ことしもまたホンコさんのシーンになりました。おかげさまで生かされているこのよろこびを仏だんの前でたしかめ合ひましょう。

52年度一般寺費決算

収入	1,500,000	支出	1,500,000
1. 宗	費	198,000	
2. 教	化 費	33,000	
3. 営	繕 費	212,500	
4. 運	営 費	96,500	
5. 火	災 保 險	80,000	
6. 乗	用 車	370,000	
7. 法	事 準 備 費	390,000	
8. 光	熱・衛生費	120,000	

53年度一般寺費予算

収入	1,500,000	支出	1,500,000
1. 宗	費	250,000	
2. 教	化 費	400,000	
3. 営	繕 費	400,000	
4. 運	営 費	120,000	
5. 火	災 保 險	80,000	
6. 維	持 管 理	70,000	
7. 法	事 準 備 費	410,000	
8. 光	熱・衛生費	120,000	



やった！連続優勝！

富山教区の日曜学校連盟ソフトボール大会は、八月二十六日、富山市民グラウンドで開かれ、参加十三チームの間で熱戦がくりひろげられました。うらやま日校Bチームは抜群の強さで、昨年に引きつづき連続優勝。カップ、賞状を手し、みんな大よろこびでありました。

明教院ゆかりの地へ聞法バス旅行

秋の間法旅行はいよいよ、明教院ゆかりの地へ。生家・水橋渡辺家、勉学の寺・上市明光寺、大谷本廟に参り、師の偉業を今にうけつぐ常見寺、行信教校（若院の実家）で一泊聞法。

二日目は、師ゆかりの寺、大阪住之江の祐貞寺。そして黄金の日々でおなじみの堺の町で一泊。三日目は、京都の本山、映画村などをたずねて、吉崎御坊にも参る予定。申し込みしめ切りは10月20日

11月7・8・9日 一人二万八千円 申込10月20日迄です

合 掌

寺報「善巧」第8号をお届けします。今回は、前住三十三回忌法要と、三法要記念の建設事業の特集になりました。

いまから五十年前に明教院の百五十回忌をつとめた前住職。その前住職の三十三回忌に、明教院二百回忌の記念事業の完成——まことにありがたい縁であり、善巧寺にとっては、多くの思い出を残すよるこびの年となりました。

これもひとえに、門徒の方々のあたたかい協力賜物と、心から感謝せざるはおれません。とりわけ、休みなく早朝から深夜まで仕事に没頭して下さった大工さん再三、再四の会合に足を運んで下さった総代の方々、そしてお講や寺参りの折に、声をかけて下さった門徒の皆さん。その心の結晶が、庫裡増築となつて完成したのです。三法要は四年後であり、本堂修復もこれからであります。わたしたちはこのよろこびをバネにして、ともどもに心のふるさとの完成に勇邁進してゆきたいと思ひます。



佐々木大樹氏作